

新本『老乞大』における増加部分について

竹越 孝

1. はじめに

金文京等(2002)は、1998年に韓国の大邱で発見された、いわゆる『旧本老乞大』に対する本邦初の訳注であり、極めて価値の高い書物であるが、その冒頭に見られる凡例第一条の記載は次のようになっている：

本書は、『旧本老乞大』(擬題)の全訳注である。原文には句読点、分段などは一切ないが、本書では、『翻訳老乞大』の分段にしたがって、全書を百六話に、さらにそれを六つの章に分け、各々の章、話に小題をつけた。
(金文京等 2002 : 3)

この部分には次の二つの点で問題がある。その一つは、『翻訳老乞大』は分段をしていないことであり、もう一つは、『翻訳老乞大』と同じ系統に属する『老乞大諺解』によって分段しても106話にはならないことである。

2. 諸本における分段

まず、現存の『老乞大』・『朴通事』諸本における分段の状況とその表示方法は以下の通りである¹：

		漢字本	諺解本
未分段		『旧本老乞大』(14c?) ; 漢字本『老乞大』(刊年不明)	『翻訳老乞大』(1517以前)
分段	改行	『朴通事新釈』(1765以前)	『翻訳朴通事』(1517以前) ; 『朴通事諺解』(1677) ; 『朴通事新釈諺解』(1765) ; 『重刊老乞大諺解』(1795以後)
	魚尾		『老乞大諺解』(1670)
	○印	『老乞大新釈』(1761) ; 『重刊老乞大』(1795)	

上表によると、『老乞大』では『老乞大諺解』²、『朴通事』では『翻訳朴通事』が最も早く分段を行っているテキストである。なお、『奎章閣叢書』第9所収の

¹ 拙稿(2006)参照。なお、表は刊行時の状況であって原所蔵者による墨書等は考慮しない。

² いわゆる顕宗本(戊申字本)を指す。

漢字本『老乞大』³では段落境界に「一」が墨書されており⁴、それは『老乞大諺解』における分段と一致するので、原所蔵者が同本に基づきこの記号を付したものと推定される。金文京等（2002）は、実際には『老乞大諺解』ないしはそれに基づく漢字本『老乞大』の分段に依拠していると見てよい。

3. 新本における増加部分

周知のように、『老乞大』・『朴通事』の第一次改訂は成宗 11 年から 14 年の間（1480-1483）に房貴和・葛貴という二人の中国人によって行われ⁵、これによって旧本・新本⁶という系統の違いが生まれたとされる。1998 年発見のテキストが旧本の系統に属するであろうことは疑いない。そして、新本の系統に属する『老乞大』のテキストとしては、『翻訳老乞大』、『老乞大諺解』及び漢字本『老乞大』がある⁷。

さて、『老乞大諺解』の分段に基づくと全書は何話になるかという、107 話である。これは新本『老乞大』が旧本『老乞大』に一話分の増加を行っていることによる。

具体的には第 72 話にあたる部分の末尾で、旧本では反物の種類が列挙されるところで終わっているが、新本では、

〔漢⁸〕 這們的紵絲和紗羅都有麼？（『翻訳』下 25a2-3；『諺解』下 22b5-6；漢字本 32b2-3）

という問いかけがあり、それに答える形で次のような会話が続く：

〔主〕 客人你要南京的那杭州的蘇州的那？

〔漢〕 大哥，南京的顏色好又光細，只是不耐穿。杭州的經緯相等。蘇州的十分澆薄，又有粉飾不牢壯。（『翻訳』下 25a4-25b3；『諺解』下 22b6-23a4；漢字本 32b3-6）

『老乞大諺解』ではここで花紋魚尾が挿入されているから、以降は新本における第 73 話ということになる。旧本にはこれに対応する部分がない。その内容は以下の通り：

〔漢〕 你有好綾子麼？

〔主〕 你要甚麼綾子？

³ 現ソウル大学校奎章閣所蔵の侍講院旧蔵本（奎 6293）。

⁴ 『翻訳老乞大』にも段落の境界とおぼしい墨書が認められるが、ごく一部にしかない。拙稿（2006）参照。

⁵ 『成宗實録』11 年 10 月乙丑条、14 年 9 月庚戌条などに見られる。小倉進平（1940）参照。

⁶ 一般的な理解に従えば、旧本は「古本」、新本は「今本」という異称を持つ。

⁷ これら現存の新本系『老乞大』諸本間における差異については拙稿（2005）を参照。

⁸ 以下の引用では金文京等（2002）に基づき推定される話者を〔 〕内に示す。〔漢〕は漢人、〔主〕は反物屋の主人。

〔漢〕 我要官綾子。

〔主〕 那嘉興綾子不好？客官你要絹子麼？我有好山東大官絹、謙涼絹、易州絹、倭絹、蘇州絹、水光絹、白絲絹。

〔漢〕 我只要大官絹、白絲絹、蘇州絹、水光絹。其餘的都不要。

〔主〕 你有好絲麼？

〔漢〕 我多要些。

〔主〕 要甚麼絲？

〔漢〕 我要白湖州絲、花拘絲。那定州絲不要。（『翻譯』下 25b3-26b2；『諺解』下 23a5-24a2；漢字本 32b6-33a2）

『老乞大諺解』ではここで再び花紋魚尾が挿入されており、以降は新本における第 74 話ということになるが、その内容は旧本に対応したものである。金文京等（2002）ではこれを第 73 話としているので、以後は旧本と新本の話数が一つずつずれていく。このように、『老乞大諺解』による限り全書は 107 話になるわけであるから、原則論から言えば 106 話はあくまでも金文京等（2002）によるオリジナルな分段である。おそらく誰でもが行う措置であろうが、この点についての説明はやはり凡例でなされるべきであろう⁹。

4. 増加の意図と背景

前節に引いた新本『老乞大』の第 73 話にあたる部分は、現存の『旧本老乞大』に対応する内容が存在しないのであるから、15 世紀末における第一次改訂の際に付け加えられたと考えてよい¹⁰。上を見る限り、このような増加を行った意図は明白であろう。即ち、中国南方の地名を織り込むことである。

増加部分に見られる地名は南京、杭州、蘇州、嘉興、山東、易州、湖州、定州の 8 箇所であるが、山東以外は『旧本老乞大』に対応する地名がなく、この部分が初出である¹¹。このうち易州と定州は北直隸（現在の河北省）に属するが、他に江南の地名であることは言うまでもない¹²。

新本『老乞大』に南方の地名が織り込まれていること背景には、明代以降「南京」の重要性が増したことが関係していると考えられる。というのも、新本『老乞大』において「南京」という地名は全部で 4 回見られるが、上に引いた部分以外の 2 例では、旧本における「服地」を改訂した地名として現れるからである。

⁹ なお、金文京等（2002：239）の注 23 における言及は次の通り：「なお『翻譯』の後半のやりとりが『旧本』にはない。」

¹⁰ もちろん、全書を段落分けするという発想はかなり後になって生じたものであるから、改訂当初には一話を増やすという意識はなかったはずである。

¹¹ 山東は『旧本』の第 9、60、67 話に見られる「直南」に相当する。

¹² 現在の行政区画では南京・蘇州が江蘇省、杭州・嘉興・湖州が浙江省に属する。

まず、旧本第 73 話の、

〔漢〕 這金胸是草金，江南來的，你索三定呵，這服地眞金的却賣多少也？
（『旧本』 27a4-5）

という部分を、新本第 74 話では、

〔漢〕 這織金胸背是蘇州來的草段子，你討七兩時，這南京來的，清水織金絨段子，却賣多少？（『翻訳』下 27b1-6；『諺解』下 24b-25a3；漢字本 33a8-10）
として、「江南」を「蘇州」に改めるとともに、「服地」を「南京」に改めている。また、旧本第 74 話の、

〔主〕 這段子外路的不是，服地段子有。（『旧本』 27b4-5）

という部分も、新本第 75 話では、

〔主〕 這段子是南京的，不是外路的。（『翻訳』下 29a9-29b1；『諺解』下 26b4-5；漢字本 34a1-2）

として、同様に「服地」を「南京」に改めている。

金文京等（2002）によると、旧本における「服地」は「腹裏」即ち大都を中心とする中央政府直轄地域のことと推定されるという¹³。これが正しいとすれば、「服地」→「南京」は改訂者が南京を「直隸」即ち政府直轄地と意識していない限り起こり得ない改訂と言える¹⁴。

5. おわりに

このように考えたとき、新本が旧本に存在しなかった江南の地名をことさらに加えているように思われるのも、現在首都であるか、あるいはかつて首都であった政府直轄地としての南京、及びその周辺の江南地域に言及しておく必要があつてのことではないかと想像される。それが単に反物に冠する地名に過ぎないのは、あくまで改訂である以上、ストーリー展開に直接関わるような内容を加えるわけにはいかなかったためであろう。

本書の内容は旅行・交易に関する会話より成っているが、いま試みにそれにあられた地名を調べてみると、南京、蘇州、湖州、杭州、易州、定州などもみえるが、それらはいずれも織物などに冠せられた名であつて、実際に朝鮮人が交易のため旅行したらしい地点としては、朝鮮から近い順にあげると、義州、遼陽、夏店、北京、涿州、高唐、東昌などがあり、更に海港として直沽がある。これによってみると当時交易のために華北を旅行した朝鮮人の足跡はせいぜい山東省の北部までしか及んでおらず、黄河

¹³ もっとも、金文京等（2002：242-243）の注 6 によると新本が「南京」に改訂していることも「服地」＝「腹裏」説の根拠の一つであるから、循環論に陥る危険性もなしとしない。

¹⁴ 南京が首都であつたのは明朝の成立（1368）後永楽 19 年（1421）までの間であるが、成祖による北京遷都後も変わらず直隸としての地位にあつた。

の南には行かなかったもののようである。『老乞大』に用いられている言語はだいたい以上の地方において通じうるものとして書かれたものであろう。

(太田辰夫 1953)

これは『旧本老乞大』が発見されるはるか以前、1950年代に太田辰夫氏が述べた推定である。誠にその慧眼には驚くほかない。

<参考文献>

太田辰夫 (1953) 『『老乞大』の言語について』『中国語学研究会論集』1: 1-14; 太田辰夫 (1988)

『中国語史通考』: 238-252. 東京: 白帝社.

小倉進平 (1940) 『増訂朝鮮語學史』東京: 刀江書院。

金文京・佐藤晴彦・玄幸子訳注、鄭光解説 (2002) 『老乞大—朝鮮中世の中国語会話読本』

東京: 平凡社 (東洋文庫 699).

竹越孝 (2005) 「今本系《老乞大》四本的異同點」嚴翼相・遠藤光曉編『韓國的中國語言學

資料研究』: 129-159. ソウル: 學古房.

竹越孝 (2006) 『『翻譯老乞大』に見られる墨書について』『KOTONOHA』40: 13-22.